

百閒漫歩：逢魔が時の文学（その3）

森，茂太郎
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/21010>

出版情報：Stella. 30, pp.33-54, 2011-12-20. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：



百聞漫歩

——逢魔が時の文学——

(その3)

森 茂太郎

「狐は臭い」

世界中から、世界の隅隅から、世界の果てからも、人並はづれたノツボやデブの大飯喰らひがやつて来て、代代木の鴉を追つ拂ひ、選手村に巣くつて日本の御馳走を食べ散らかし、食ひ荒らした。

十何年前のあの時分、こちらが食べる物に不自由してゐるところだつたら、氣にせずにはゐられないが、今ならまあ構はない。遠い所からやつて来て、水が變つてもそんな事は平氣だつたのか。新聞なぞで見ると、何しろ恐ろしく食つて食つて、食ひまくつたらしい。自分のお國では有りつけなかつた御馳走に、うつつを抜かしてゐる様で、いぢらしくもあるが、おいしかつたなら、それでよろしい。お行儀がいいの、悪いの、そんな事を云つてやしない。鰻腹、腹一ぱい詰め込んでおいて、走つたり飛んだり、跳ねたり泳いだり、人を押しのけて勝てば御褒美のメダルを貰ふ。¹⁾

こういう文章に接すると、いやはや百聞先生は攘夷派なるかなと、思わず嘆声を發せざるを得ない。焼け跡がなくなり、東京が復興し、日本がもはや昔の日本ではなく平和国家になったことを世界にアピールするための「平和の祭典」も、先生にかかつては、たちまち大食漢どもの乱痴気騒ぎに一変する。たらふく御馳走を食べて、しかる後、「走つたり飛んだり、跳ねたり泳いだり、人を押しのけて勝てば御褒美のメダルを貰ふ」、それが先生のオリンピック——東京オリンピックなのだ。いやいや、「オリンピック」などと言つてはいけなない。「原爆ドーム」と同じく、先生の辞書には「オリンピック」という語は存在しないのだ。華々しく開催される「平和の祭典」の影で、しかし「代代木の鴉」はねぐらを失い、お濠の水は涸れ、先生の三疊御殿の周りにも巨大なビルが建ち並び、戦前の東京の名残はまったく姿を消した。近代化を至上目的として、古里の土手の藪を惜しげもなく刈り倒した「先覺者達」の狂気は、今また東京の古

い街並みを容赦なく破壊して、とどまることを知らないのだ。

先生は攘夷派である。オリンピックを機に我が国を訪れる外国人は、先生にとってはことごとく夷狄なのだ。そして夷狄の道は、口腹の欲を満たす餓鬼道の道、弱肉強食の畜生道の道である。開国があり、文明開化があり、敗戦と占領があった。今度はオリンピックである。夷狄はついに国土を蹂躪したのだ。しかも東京でオリンピックを開催し、彼らを率先して首都に迎え入れたのは、ほかならぬわれわれ日本人なのである。こうして「世界中から、世界の隅隅から、世界の果てから」、「大飯喰らひ」の外国人が大勢やって来て、「日本の御馳走を食べ散らかし、食ひ荒ら」す。

外国人に対する排外的感情、いわゆる「異人恐怖」(xénophobie)は、往々にして彼らの体臭に対する嫌悪感、不快感となって現れるが、百聞の場合も例外ではない――

……毛唐人の若い者には相當くさいのがある。特に今度の様に、今迄あまり行き來のなかつた遠隔の國から來た諸君の中には、ふだん我我がにほひ馴れないにほひのするのがゐるに違ひない。²⁾

ところで、狐は臭い。狐の化けの皮が剥がれるのは大抵はその異臭のためだが、しかし外国人も臭い。臭い外国人の中に、臭い狐が一匹や二匹紛れ込んでも、「狐たるもの、意を安んじて可なり。わかりつこないよ」。

やがてオリンピックも終りに近づき、開会式以来十五日間燃え続けていた聖火台の火が消され、スタンドを埋めつくした観衆も家路についた――

騒ぎがをさまり、興奮が去つて、後は人つ氣のない場内に巨大な闇がかぶさり、夜が更けて行くばかり。それをその儘にしてほつておいていいのか、代代木の狐、狸ども。³⁾

「興奮」の後にはその「繰り返し」があつていいし、またあつてしかるべきであると先生は言う。しかるに、「代代木の狐や狸」はいったい何をしているのか。「興奮」が去った後の「空白」を、「七萬五千の大観衆をスタンドに詰め込んだ光景」でもう一度埋めてみせる「洒落氣」はないのか。

往時を顧みれば、明治の狐はまだしも意気地があつた。白砂青松の波打ち際近く、明るい窓をつらねて走る幻の夜汽車。あるいはまた、気丈な娘であつた祖母を幻惑しようと、暗い山裾に「ずらずら」と並んだ「赤い綺麗な燐」。しか

し何時の頃からか、彼らの影は薄くなり、その神通力には翳りが見えはじめたようである——

そもそも當節は妖怪變化の影が薄い。なぜかはしき限りである。明治以來の文明開化の成れの果て、迷信を打破し、空想の根を芟除^{そりじよ}して、人間がさうするから妖怪變化どもは手が出ないし、張り合ひもないだらう。

その爲この興奮の後の空白を取り繕ふ事が出来ないとすれば、しかし、矢つ張り汝等は甲斐性無し^{めいせいなし}の、意氣地無し^{いきちなし}の、腑甲斐無し^{ふかいなし}である。山裾につらなる狐火の列、松林の中を走り抜ける狐の夜汽車の昔を想うて感奮興起せよ。⁴⁾

しかし、それにしてもなぜ、戦後の狐はこうまで「甲斐性無し^{めいせいなし}の、意氣地無し^{いきちなし}の、腑甲斐無し^{ふかいなし}」になってしまったのだろうか。ひとつにはそれが、攘夷派の先生が慨嘆するように、迷信打破を叫んだ「明治以來の文明開化」のせいであることは疑いない。狐がその通力を失ったのは、人間どもが彼らを信じなくなったからである。そして人間どもが彼らを信じなくなったのは、文明の進歩とともに、いつのまにか「空想の根」が「芟除^{そりじよ}」されてしまったからである。だが、果して、ただ迷信打破のかけ声だけで、人間の空想力がそれほどまでに涸渇してしまうものなのだろうか。そこには何か、文明の発達という以上の、もっと奥深い原因が隠されてはいないだろうか。いずれにせよ、われわれ「開化」された現代人が容易に狐に化かされなくなったことだけは確かである。化かされるにも、それなりの才覚が必要なのだ。

＊

百閒は高校生の頃、東須磨の海岸で夏休みを過ごしたことがあった。主人が社命で洋行中の家に置いてもらい、一夏のあいだ世話になったのである。留守を守っていたのは、老母と若妻と一人娘の三人。女ばかりで不用心だからと、百閒を置いてくれたのだろう。家の周囲は松林で、人家はまばらであった。

学校でたまたま習ったドイツ語に、「シュトロー・ギトゴ」というのがあった。「シュトロー」は「藁」で、「ギトゴ」は「寡婦未亡人」である。「若後家」ならぬ「藁ごけ」と百閒は洒落ているが、「シュトロー・ギトゴ」は、夫の船乗りが遠洋航海に出ている留守居の妻のことを言う。それなら、夫が社用で海外

に出張中のこの家の若い奥さんも、「藁ごけ」の仲間なのだろう。「シュトロロー・ギトゴには間違ひが起こり易いと云ふ。しかしそんな事は私の知つた事ではない」⁵⁾。

この「藁ごけ」の奥さんが、毎晩、百間が間借りしている二階の部屋に上つて来て、蒲団を敷いて、蚊帳を吊ってくれる。「色は白くないけれど美人で、いつも身なりはきちんとしてゐたが、體臭の強いのが氣になつた」。百間は蒲団にもぐり込むとすぐに寝てしまい、「後は何も知らない」――

その寝つく迄の、ほんの僅かな時間に、梯子段を蹈んで人が上がつて来る音がする。寝る前の、寝巻に着換へた奥さんが蚊帳の裾を傳つて電氣の下の机の前へ行つて坐る。寝る前に毎日その日の日記をつけるのださうで、出来事の心覚えだけでなく、その日その日のお金の出し入れも控へておくのかも知れない。御主人の留守中の妻の仕事として當り前の事だらう。

ただ、ひどく氣になるのは、奥さんが蚊帳の外へ坐ると同時に、中まで體臭がにほつて来る。非常に強烈だが、わきがではないのだらう。しかしわきがとすれすれの様なところもある。

或る晩、奥さんが蚊帳の外から聲を掛けた。

もうお休みですか。

いいえまだです。

毎晩お邪魔をして済みませんね。

いいえ構ひません。

その晩は降りて行く時、お休みなさいと云つたのを、うつらうつら聞いた様な氣がする。尤もその晩に限らず、何か云つて降りたか、いつもは黙つてゐるのか、それは丸でわからない。日記をつけ終るのにどの位掛かるか知らないが、上がつて來た時は大概まだ眠つてゐないけれど、降りて行く時まで目をさましてゐた事は一度もない。

朝になると、電氣は常額燈だからひとりでに消えて、その眞下の机の上に死んだ蟲が散らばつてゐる。⁶⁾

この隨筆には「知らない」という言葉、あるいはこれに似た表現が多用され、しかもその多くが「藁ごけ」の奥さんに関係している――「シュトロロー・ギトゴには間違ひが起こり易いと云ふ。しかしそんな事は私の知つた事ではない」、
「その机はこの家の奥さんの机で、抽斗には何か奥さんの物が這入つてゐるらしく、私は使はない事にしてゐたが、机の抽斗なぞ私に用はなかつた」、
「何か云つて降りたか、いつもは黙つてゐるのか、それは丸でわからない」、
「日記をつけ終るのにどの位掛かるか知らないが……」。ほかに、「蚊帳の中に這入り、

枕に頭をつけるとすぐに寝ついた様である。さうして後は何も知らなかつた、「毎日晚になればちきに寝てしまつて朝まで何も知らない」などがあり、この二例はいずれも百閒自身のことであるが、「藁ごけ」の奥さんを念頭に置いて言われていることは間違いない。

これだけ似たような表現をいくつも繰り出して「知らない」ということは、実は「知っている」ということである。「知っている」のに「知らない」ふりをする、それも自分自身に対して「知らない」ふりをするのである。つまり、そこには知ってはならないものがあり、それを「知っている」からこそ、あくまで「知らない」ふりをするのである。「知っている」のに「知らない」ふりをする、周知のように、精神分析ではこれを「抑圧」と呼ぶ。

奥さんがただ日記を付けるために二階に上って来るのではないことを、百閒は知っていた。蚊帳の中まで臭ってくる強烈な体臭の意味を知っていたし、「もうお休みですか」という奥さんの言葉の意味するものも知っていた。要するに、「シュトロ―・ギトズには間違ひが起こり易い」ということを知っていた。「知っていた」にもかかわらず、「知らない」ふりをしたのである。百閒にまったくその気がなかったわけでもないらしい。「わきがではないのだらう」ということは「わきがである」ということだし、「机の抽斗なぞ私に用はなかつた」ということは、抽斗の中に何があるか覗いて見たかつたということである。「机」や「抽斗」の象徴的な意味、そしてその中を覗いて見るという行為の持つ性的な意味合いについては、今さらここで喋々するにはおよぶまい。

実を言えば、「浦づたひ」と題されたこの随筆には、明石から須磨まで、幼なじみの友人と一緒に夜の浦伝いを試みる冒頭の文章から、百閒のものとしては珍しく、sexual な雰囲気が濃厚に立ちこめていた。明石の宿屋で「女中のお給仕でおとなしく御飯を食べて」から、二人は砂浜を歩いて須磨へ向う。ようやく須磨の町にたどり着いた時は、もう真暗になっていた。駅の待合室で夜を明かしていると、駅前の二階屋の窓が暑いので開け放たれ、家の中が丸見えである。「腰巻き一つの裸のお神さんらしい女」が蚊帳の裾をまくりあげて寝床に入り、「六尺廻しをきゅつと締めた裸の男」が手にした団扇で蚊帳の裾を扇ぎながら後に続いた――

外から二階の蚊帳の中は見えない。しかしどうも面白くない。二人とも前後のいちぶ

しじふ
一什を見てゐたのだが、それに就いてどちらからも何も云ひ出さなかつた。
その内に後ろの窓縁に頭をもたせて、うつらうつら眠つた。⁷⁾

朝になって二人は別れ、百間は予定通り大阪へ向つた。ところが岡山に帰つたはずの友人は、明石で途中下車して、前日食事をした宿屋へ舞い戻つた。給仕をした女中に、「お歸りに又お寄りなさい」と言い含められていたのである。この友人の突発的な行動に、「浦づたひの擧げ句に見た窓際のうたた寝の夢うつつが、何等かのわざをしなかつたとは請け合へない」。先生はといえば、牧師の家で夕食を御馳走になり、信者でもないのに、見よう見まねで食前のお祈りをした——「昔から心事は陋劣な儘で、うはべばかりを取りつくろつた」。

では、先生は「藁ごけ」の奥さんに対しても、おのれの「心事」の「陋劣」を知りながら、「うはべばかりを取りつくろつた」のだろうか。その「心事」はどうあれ、須磨から明石の宿屋へためらうことなく直行した幼なじみに比べれば、先生の「お行儀」のよさは際立っている。確かなことは、後ほど検討する石巻の芸妓の場合とはまったく違って、寢床の中の百間は「うなされ」もしなければ、「輾転反側」することもなく、「枕に頭をつけるとすぐに寝」てしまったという明らかな事実である。

ところで、東須磨の海岸には狐が出た。京都発の下りの夜行列車が、毎晩十一時過ぎに、明石の浦に続く松林を縫って走る。波の音を圧して地響きが伝わり、明るい光が暗い松林の間をチラチラと走り抜ける。すると、少し間をおいて、またもや暗闇の中に光が明滅しはじめ、さっきと同じように明るい窓をつらねた夜汽車が通る——「後から來たのは、うその夜汽車であつて、本當はそんな汽車はない」⁸⁾。

このあたりに棲む狐の仕業だというので評判になった。住民の中には夜遅くわざわざ見物に行く者もある。百間が間借りしている家の老母が言った——「あなたも一度出掛けて見ていらつしやらぬか」。傍にいた「藁ごけ」の奥さんも相槌を打った——「ほんとに一度見ていらつしやいませ。その時は一緒に連れて行つて戴かうか知ら」。

してみれば、東須磨の海岸にはやはり狐が出たのである。「甲斐性無し、意気地無し、腑甲斐無し」の戦後の狐と違って、彼らは「興奮の後の空白を取り繕ふ」すべを心得ていたらしい。しかし、狐はいつも家の外にいるものとは

限るまい。たとえば、「藁ごけ」の奥さんが狐であるということはないだろうか。若妻と見えるのは実は幻で、本当は狐であったとしたらどうだろうか。狐の奥さんと一緒に狐の夜汽車を見物に出かければ、本物の汽車が通り過ぎた後の暗闇に、ふたたび幻の夜汽車が姿を現すかも知れない。消え失せたはずの「興奮」が、まざまざと再現されるかも知れない。「ところが本當の夜汽車が来るのが十一時十分頃で、狐の汽車はそれよりまだ後だと云ふのでは、私はそんな時間に起きてゐた事がない。毎日晚になればちきに寝てしまつて朝まで何も知らない」⁹⁾。

百間は奥さんの誘いに乗らなかった。奥さんが狐であることを知っていたからである。なぜなら、狐は臭い。「藁ごけ」の奥さんの体臭と同じように臭い――

……狐は臭い。姿や形ではわからない様にしてゐても、ブンブンあたりが臭くなつては疑はれる。狐のにはひは特殊なもので、強烈で、だから「わきが」の事を狐臭と書く。¹⁰⁾

＊

釣らうよ、釣らうよ
信田の森の
狐どんを釣らうよ

「信田の森」あるいは「信太の森」は、言うまでもなく、狐に変身した安部の童子の母、葛の葉の姿を隠した森である――「戀ひしくば訪ね来てみよ和泉なる信太の森の恨み葛の葉」。

谷崎潤一郎の『吉野葛』には、「私」の一高時代の友人である津村という質屋の若旦那が登場するが、この男は幼くして母親に死に別れたという設定になっている。「釣らうよ、釣らうよ……」は彼が記憶している童歌の一つで、葛の葉を唄ったものである。子供たちは、この「狐釣り」の歌を唄いながら、「一人が狐になり、二人が獵人になつて輪を作つた紐の両端を持つて遊ぶ」のだという。「……狐になつた者が、唄につれておどけた狐の身振をしながら次第に輪の側へ近づいて来るのが、――たまたまそれが艶な町娘や若い嫁であつたりすると、殊に可愛い」。「或るあどけない若女房で、その狐の身振が優れて上手な美しい人があつたのを、今に自分は忘れずにゐるくらいである」が、これはたぶん子供の頃、人形芝居で見た「葛の葉の子別れ」の場が頭に沁み込んでゐたせみであ

らう」と津村は言う――

あの、母狐が秋の夕ぐれに障子の中で機を織つてゐる、とんからり、とんからりと云ふをさ箴の音。それから寝てゐる我が子に名残りを惜しみつ、「戀ひしくは訪ね来てみよ和泉なる――」と障子へ記すあの歌。――あ、云ふ場面が母を知らない少年の胸に訴へる力は、その境遇の人でなければ恐らく想像も及ぶまい。自分は子供ながらも、「我が住む森に歸らん」と云ふ句、「我が思ふ思ふ心のうちは白菊岩隠れ蔦がくれ、篠の細道掻き分け行けば」など、云ふ唄のふしのうちに、色とりどりな秋の小徑を森の古巢へ走つて行く一匹の白狐の後影を認め、その跡を慕うて追ひかける童子の身の上を自分に引きくらべて、ひとしほ母戀ひしさの思ひに責められたのであらう。¹¹⁾

しかしここで見逃すことができないのは、「自分はいつも、もしあの芝居のやうに自分の母が狐であつてくれたらばと思つて、どんなに安部の童子を羨んだか知れない」という津村の述懐である。「なぜなら母が人間であつたら、もう此の世で會へる望みはないけれども、狐が人間に化けたのであるなら、いつか再び母の姿を假りて現れない限りもない」¹²⁾。すなわち、狐を媒介にすれば、この世を去った母は恋人のうちに転生するかも知れないというのである。津村は事実、苦勞して探し当てた吉野郡国栖くずの母の生家で、「何處か面ざしが寫眞で見る母の顔に共通なところ」のある娘に出会い、彼女を嫁にする。しかしこのような心理は、何も「母を知らない少年」であつた津村に限らず、あらゆる男性の奥底に潜んでいるものであらう。それこそエディプス・コンプレックスと呼ばれるものであつて、このコンプレックスに囚われた男は、恋人を選ぶとき、いつのまにかそこに懐かしい母の「面ざし」を重ね合わせてしまうのである。しかし、それは母ではない。女に姿を変えた母は、どれほど母に似ていようと、決して失われた母そのものではありません。それはただ子の幻想（fantasme）のうちにおいてのみ母であるにすぎず、本物の汽車が通過した後にやってくる「うその夜汽車」、「走つてゐた途中で、ふつと消えてしま」う幻の夜汽車にすぎないのだ。しかしこの「うそ」がなければ、姿を消した母といつか再会するという望みもまた永遠に失われてしまうのである。

百間を誘惑しそこなつた「藁ごけ」の奥さんは、いったいどこに落ち度があつたのだろうか。もちろん、「狐臭」がいけなかつたのである。セックス・アピールの度が過ぎて、あまりにも「女」でありすぎたのである。男なら誰でも狐に化かされるとは限らない。すでに一言したように、化かされるにも才覚が必要

なのだ。狐の「うそ」に首尾よくだまされるには、まず母が失われていなければならない。つまり子は、母に棄てられた悲しみを味わったことがなければならない。それならば、母はなぜ子を棄てるのだろうか。言うまでもない、母は子供の母親であるばかりではなく、同時に父の妻でもあるからである。そして父の妻としての母は、子との肉感的な絆をみずから断ち切り、乳房から引きはがされて泣き叫ぶ子を、「父」の掟の支配する世界へと旅立たせねばならない。それがなされぬ限り、子は母の欲望に縛られたまま、他者たちの世界で生きる道を閉ざされてしまうであろう。

ところで、百閒は母に棄てられたことがあるのだろうか。母に棄てられた悲しみを噛みしめたことがあるのだろうか。いや、そもそも百閒の母お峯さんは、志保屋の跡取り息子である百閒の我儘を許さぬことがただの一度でもあったのだろうか。

＊

海へ行く途中の道ばたに大きな^{むく}棕の木があつて、その上の方の高い枝で小鳥の群が騒いでゐる。ケク、ケク、ケクと聞こえる變な鳴き聲で、鳴きながら枝から枝を飛び交ひ、何だか落ちつかない氣がする。豆廻し、即ち^{いかる}斑鳩ぐらゐの大きさの鳥で、姿も似てゐるが腹が赤い。腹の赤い豆廻しなぞゐない筈である。¹³⁾

その先の松林の中に、「いろんな罐詰類や清涼飲料水」を商っている店がある。百閒は海からの帰り、いつもその店に立ち寄って、井戸で冷やした「ジンジャーエールやリモネード」を飲んだ――

抜ける程色の白いお神さんがいつも店番をしてゐた。稍平つたい感じのする顔立ちの美人であつたが、ひどいびつこで、坐つてゐればわからないが、起ち上がるとつい二足三足の先へ行かうとするにも上體が大搖れに搖れて傾いて大騒ぎになる。初めてその様子を見た時はびつくりした。

このお神さんは「ひどいびっこ」ではあるけれども、あるいはまさにそれゆえに、「藁ごけ」の奥さんに比べて遙かに母性的で、それだけに百閒も余計な警戒心を働かせることなく、安心して「懇意に」なることができたのであろう。ところで、百閒のためにいつもレモネードを用意しておき、彼が立ち寄ると「不自由な足」で冷やした瓶を井戸から揚げしてくれるこのお神さんは、果して女な

のであろうか。なぜなら、このあまりにも母性的で愛想のよすぎのお神さんは、たしかに女であることは疑いないとしても、ただそれは「びつこ」という形で、象徴的に女であるにすぎないからである。つまりこのお神さんは、母でもなければ女でもなく、「ケク、ケク、ケク」と「變な」声で鳴く代りに「びつこ」をひき、女に似ているが女ではない、まるで「ゐない筈」の「腹の赤い豆廻し」のように奇態な、あり得ない生き物なのである――

びつこの美人のお神さんのお酌でラムネのリモネードをがぶがぶ飲んで飲み過ぎたと云ふわけではないが、元來がさう云ふ物が好きであり、そばでそんなに飲んではいかと云ふ者もゐなかつたから、飲みたいだけ飲み放題に飲んだ。¹⁴⁾

「そんなに飲んではいかん」と叱る者がいなかったのは、これが最初ではない。小学一年生の頃、学校で泣いてばかりいた百閒は、家に帰るとすぐさまお峯さんの膝に這い上がり、「もう薄く水つばく、餘り出もしない母の乳を吸つた」¹⁵⁾。その光景は、先生ならずとも、「思ふだに馬鹿馬鹿しい」。母の乳房には「赤黒い梯子の様な形」をした手術痕が残っていたが、「そこへ武者振りついていのちの限りと薄い乳を吸ふ。それを又抱きかかへてゐた母のお峯さんもどうかと思ふ」。小学一年なら七歳だが、「どうも九つ時分まで、出もしないお乳をしゃぶつたらしい記憶がある」¹⁶⁾。

こうなると、フロイト先生ならずとも、東須磨のラムネ屋の店先で、百閒はいったい何を飲んでいたのであるかと疑いたくなってくる。「美人のお神さんのお酌」でレモネードを「飲み放題に飲ん」でいた時、百閒がそれと知らずに飲んでいたのは、実は「母の乳」ではなかったらうか。「薄く」て「水つば」い、お峯さんの「お乳」ではなかったらうか。それなら、レモネードを冷やして海から帰る百閒を待ち受けていた「綺麗なびつこのお神さん」は、やはり狐だったのかも知れない。女に化けて誘惑するのには失敗したが、「お乳」で籠絡するのはままと成功したのかも知れない。小学生にもなって母の乳をしゃぶるのは、「いくら一人子だつたと云つても、甚だどうかと思はれる様で、料簡を改めたいと思ふ」と百閒は反省しているが、この一件で見限る限り、先生の「料簡」は少しも改まっていなかったようである――

月ずゑが近くなつて、神戸から来る店員が書付けを置いて行つた。それを見て私は

急にうろたへた。リモナーデその他、無闇に飲んだ飲料水の代金が大變な金高になり、うちから貰つて来てゐるお金では足りない。[……] 憂鬱になつてうちへ電報を打つた。お金が足りなくなつたから、電報為替で十圓送つて下さい。¹⁷⁾

お金は母が持つて来た。「美人のお神さん」は結局媒介者にすぎず、「リモナーデ」がその象徴である「お乳」を「飲み放題に飲」ませたのは、「飲料水の代金」を支払った母のお峯さんだったのである——

〔母親は〕私を見て、私の話を聞いて、お金の用途を知つて安心したと云つた。若い者を大分長い間、一人でよそへ出しておいたから、きつと何か間違ひを起こしたのだらう。心配だから行つて見て来いとおばあさんがさう云つたと云ふ。

ラムネのリモナーデで遣ひ込みをするぐらゐが精一ぱいなのであつた。¹⁸⁾

戯れに、この末尾の一行を「お峯さんの水つぼい乳を吸ふぐらゐが精一ぱいなのであつた」と書き換えると、先生に叱られるであらうか。

＊

こう言ったからとて、私は何も先生をむりやりフェミノフォービアの患者に仕立て上げるつもりはない。何より先生は、中学以来の親友の妹を妻に迎え、この妻との間に五人もの子を儲けているからである。それにまた、百間が九歳の頃まで母親の乳を吸っていたといつても、それは「もう薄く水つぽ」くなった乳にすぎず、しかもその乳房には「赤黒い梯子の様な形」の傷が付いていた。つまり百間は、一見そう見えるのとは反対に、疑いもなく母親に棄てられていたのである。婆やの付き添いがあつたにせよ、教室で泣いてばかりいたにせよ、とにかく学校へは通ひ続けたのだから、見上げたものではないか。

それにしても、先生のヴィタ・セクスアリスについて、あまり偏ったイメージを与えるのは慎まねばなるまい。フェミノフォービアという先ほどの診断に対しては、先生が「ぞつこん惚れ込ん」だという石巻の芸妓が有力な反証となるだろう。仙台の高校に赴任していた友人の招きに応じて彼の地を訪れた先生は、この友人とともに、「恐ろしく長い土手」に沿って走る小さな汽車に乗って、石巻に出かけた——

石ノ巻の北上川畔の料理屋に現はれた藝妓は著つけもよく、若くて綺麗であつた。

東北の奥のこんな所に、と意外に思ふ程であつた。

お座敷の挨拶をして、一言二言言葉を交はした途端、私の方が先に、おやと思つた。

「をかしいな、君の口の利き方は、この邊ではないだらう」

「はい、備前岡山で御座います」

聲を上げる程、びつくりした。北上川の長い土手を傳つた擧げ句のこんな所で、古里の郷音を聞かうとは。

こちらがすっかり上がつて、わくわくする氣持になつた。ぞつこん惚れ込んだと云ふのだらう。¹⁹⁾

「若くて綺麗」、それに「古里の郷音」。しかも話を聞けば、この芸妓は百間と同じ町の育ちだというではないか。それが、どういう境遇の変化か、郷里から遠く離れたこんな東北の田舎町で芸妓に出ていたのである。先生は「その女が懐かしくて堪らなくなつた」²⁰⁾。こうなると、先生の「お行儀」もいたって怪しいものだ――

友人と二人一緒の蚊帳に寝たが、友人はすぐに寝ついたらしいけれど、私は中中眠られない。藝妓の事が氣にかかる。後を追つ掛けたいなどと、そんな氣持ではないが、うなされてゐる様で、輾轉反側して、ろくろく眠られなかつた。²¹⁾

先生の「心事」はいかにも「陋劣」、しかも「うはべ」を「取りつくろ」う余裕すらなかったものと見える。しかしこの芸妓の傍にいと、たちまち「上ずつた氣持」になり、「寛いだ口」がきけなくなるというのだから、やはり先生は女性に関してはかなり奥手である。三人連れ立って海辺の丘に登った。頂上に立つと、眼下に「すさまじい青さ」の海がひろがり、目を見はるほど広大な砂浜に「太平洋の大浪」が打ち寄せていた――

彼女は私共に交じり、いそいそしてゐる。こんな所へ遊びに来て愉快なのか、商賣上のお附き合ひか、そんな事はわからない。何かしたはずみに、私の前に起つたまま、手を挙げたら、白い綺麗な二の腕の奥まで見えたので、はつとした。²²⁾

アッと息を吞ませる、鮮烈なエロティシズムである。ところで、旅先で出会つた芸妓に先生がたちまち「一目惚れ」してしまったのは、この芸妓がただの芸妓ではなく、懐しい古里につながる女、記憶の底から浮び上つた幻の女であつたからに違いない。この芸妓に、近所でも評判の美人であつたという「志保屋のお峯さん」の面影があつたかどうかは分らない。しかし百間の回想によると、

お峯さんは三味線を弾くとき、撥を持つ腕がすべらないようにするため、「舌を出して腕の裏側をべろりと舐める」癖があったという²³⁾。そのとき、まくり上げた袂の袖口から、「白い綺麗な二の腕」がちらりと見えることはなかっただろうか。百間はそれが「いやであつた」というが、なぜ「いや」であつたかといえ、そこに「女」を嗅ぎつけたからである。さらにいえば、母の中に「女」を見てしまった自分を意識するのが「いや」だったからである。だが、その「いや」であつたはずの「二の腕」が、女性に「ぞつこん惚れ込む」ためにはなくてはならぬフェティッシュとして、いつのまにか百間を幻惑しはじめる。幼い百間を怯えさせた母の中の「女」は、ひとたび他の女性に移し替えられるや、今度は女の中の「母」として、大人になった百間を惹きつけてやまないのだ。『吉野葛』の津村が「水の中に漬かつてゐる赤い手」²⁴⁾に故知らず惹かれたように、百間もまた石巻の芸妓の「白い綺麗な二の腕」に、懐しい「母」の名残を認めたのではないだろうか。いずれにせよ、この芸妓の「二の腕の奥」から「狐臭」が漂うことなどなかったに違いない――

昨夜の旗亭の席上で岡山の話をし、京橋を知つてゐるかと尋ねたら、あの邊にゐたのですと云ふ。後に母に連れられて岡山を離れました。あの川岸の片側町の様子はよく覚えて居ります。

覚えてゐれば夢に見る事もあるだらう。夢の中でいいから、その道をもう少し川下の方へ行つて、町が切れたら土手になるから、その上をもつと先の方へ行きなさい。²⁵⁾

川岸の道を「もう少し川下の方」へ行けば、そこはお峯さんの育った町、「黒砂糖のにはひ」のする「駄菓子問屋の町」である²⁶⁾。その記憶の奥底の町を過ぎ、町はずれの土手を「もつと先の方」へ行けば、そこにはいったい何があるというのだろうか。――海である。石巻の丘の頂上から見た、あの「すさまじい青さ」の太平洋まで続いている海である。では、百間は「ぞつこん惚れ込んだ」その芸妓、「懐かしくて堪らなくなつた」その女に、青い海原の彼方の国へ帰ることを求めているのだろうか。それならこの女は、遙かな「^{ハル}疵の國」からやって来た、折口信夫の語るあの「水の女」であるとでもいうのだろうか。

＊

古代の凡下の民たちの筋目を言ふ時、多く母系だの、父系だのと言ひ慣れて言ひ、

殊に、母系の方に傾いて説く事が多いのだが、我々の國の大昔には、却て父系の梯の辿られる事の方が、多い様である。母の家に父が通うて、生れた子は母の手離れて父の國に來て、人と成る。〔…〕其上又、稀にあつた形として考へられるのは、子を生んだ母は、幾年か後、必夫婦別れして、故郷の人となる掟である。國々の女人は、若くて神に仕へるが、其中ある時期の間、神の手を離れて人間の夫を持ち、其後さう言ふ生活から去つて、再神仕への姿に戻ると謂ふ形が、なかなか廣く又、長い時代に涉つて行はれてゐたのである。²⁷⁾

折口信夫によれば、日本の古代社会には、男が女の家を訪れるいわゆる「つまどい婚」以前に、異族の間で行われる結婚があり、信仰の異なる異族の村から來た女は、子供を産んだ後、本つ国へ歸つて行つた。したがつて、子供は物が付くか付かないうちに母親と別れねばならず、こうして幼くして母と生き別れた子供たちのうちに母を慕う心が育まれ、大人になった後々までもそれが消えずに残つた。こうした古代人の「哀愁」が幾代にもわたつて積み重ねられ、やがて「妣の國」という「陰影深い語」となつて結実したのだと折口は説く。

「妣の國」は、「水平線に達するや、舟俄かに見えざるを以て、そこにありと昔びとが空想した海坂のあなた」にあると信じられていた。そのためであらう、「此國の文學には、家を棄て、還つてしまふ海の夫人」の物語が実に多い。すなわち、水の女神、あるいは水の神の娘として水界より現れ、やがて本つ国である水界へと去つて行く「水の女」の物語である――

さう言ふ幾多の物語の榮えた後、歸る所の、必しも水界に限らぬ、もつと多くの家刀自^{イヘトジ}の話が、此國びとの間には行はれて來た。こゝには海、然る後、山野の村々と言ふ風に、他郷から娶られ來た女人の、去り行く傳へに變形して行つた様である。²⁸⁾

「信太妻」をはじめとする「狐妻」の物語が、こうした「他郷から娶られ來た女人」の「去り行く傳へ」の系譜に属するものであることは言うまでもない。「狐妻」の記憶をさらに遡れば、たどり着くのは「水の女」であつて、そうだとすれば、葛の葉が姿を隠した「信太の森」も、その原型は海の彼方の「妣の國」にあったに違いない。土手の道を「もつと先」へ、石巻の芸妓がめざしていたのは「海坂のあなた」の「妣の國」、父母未生以前の常闇の國だったのではないだろうか。『吉野葛』の津村が見逃していたのは、「狐妻」のこの他者性である。それは、異族の女であるばかりか、「海坂のあなた」の神話的な世界からやつて

来た「異界の女」,「他界の女」なのだ。すでに見たように、狐を媒介者とするならば、母は恋人に変わり得ると津村は考えた。しかしそう考えたとき、狐は母を恋人に転換する純然たる媒介者となって、母がすでに狐であることの異様さは見過ごされてしまったのではないだろうか。

ある日、葛の葉が縁側に立って庭を眺めていると、ちょうど秋のことで、菊の花が咲いていた。それは狐の大好きな乱菊であった。見とれているうちに、自然と狐の本性があらわれ、顔が狐になってしまった。傍で寝ていた童子が眼を覚まし、お母さんが狐になったと怖がって泣き騒ぐので、葛の葉は障子に「恋しくば」の歌を書き残し、信太の森へ姿を隠してしまう。「子供の無邪気な驚愕が、慈母の破滅を導く」²⁹⁾と折口は註しているが、「破滅」に導かれたのは母だけではあるまい。「慈母」が目の前で狐に変身するのを見た子供も、もはやこれまでのように「無邪気」ではあり得ない。なぜなら、「慈母」が狐になったのではなく、「慈母」と信じていたものが実は狐だったからである。呆然と目をみはる子供の前で、「慈母」は真二つに割れてしまった。「母」と「狐」,「母」と「妣」,父の妻である現実の母と、アルカイックな始原の母に分裂してしまったのである。これがラカンの言う「根源的な分裂」であって、この「分裂」なくしては、そもそも子供は欲望する主体としてみずからを確立することができないのだ――

それは〔フロイトの言う〕忘れがたい「他者」,前－歴史的な「他者」です。この「他者」をまず措定しなければならぬ必然性をフロイトは強調しています。それは私にとって「異質な」(entfremdet) もの、私の中心にありながら私とは疎遠なもの、無意識の次元では、ただ表象されるしかない何ものかとして、フロイトによって考えられているのです。³⁰⁾

「異物」(Fremde) としての「もの」(Ding) は疎遠であり、時には敵対的すらあります。それは最初の外部であり、主体の歩みはことごとくこの外部によって方向付けられているのです。それは疑いもなくコントロールされた歩み、方向付けられた歩みです。主体の欲望の世界は、それが何であれ、とにかく方向付けられるものがそこにあり、それがある程度までは役立っていることを示しています。何に役立っているのでしょうか。まさしく欲望の世界に対する参照軸として役立っているのです。〔…〕この対象〔もの〕は、すべての条件が満たされれば、最後にはそこに出現するでしょう。しかし、見出されるべきものが再び見出されることがないのは明らかです。対象が失われているのは、その本性からしてそうなのです。それは決して再発見されることは

ないでしょう。

……再発見されなければならないのは「もの」(das Ding)、主体の絶対的「他者」としてのこの対象です。対象は再発見されるかも知れませんが、しかしそれは失われたものに対する郷愁という形でしかありません。再発見されるのは対象そのものではありません。それを取り巻く快楽なのです。³¹⁾

津村の母は、彼が幼い頃に死んだ。おそらくそのために、彼は「慈母」の分裂を知らずにすみ、かえって「無邪気」に亡き母を恋い慕うことができたのであろう。だがそんな津村も、母が狐であることの異様に、少しも気付いていなかったわけでは不らしい。なぜなら、彼は自分の「奇異」な心理を分析して、「自分の母を戀ふる氣持は唯漠然たる『未知の女性』に對する憧憬」ではあるまいかと疑ってもいるからである。「母を知らない」少年である彼にとっては、「過去に母であつた人」も、「將來妻となるべき人」も、等しく「未知の女性」であることに変わりはない——「それが眼に見えぬ因縁の絲で自分に繋がつてゐることは、どちらも同じなのである」³²⁾。このとき、「未知の女性」は単なる媒介者ではあり得ない。むしろ津村は、「過去に母であつた人」や「將來妻となるべき人」を媒介にして、「未知の女性」に対する憧れを募らせているのだと言えよう。それにしても、「未知の女性」とは、いかにも明治の青年らしい、あまりにもロマンティックな言いぐさである。なぜなら、葛の葉が狐の正体をあらわしたとき、傍に寝ていた童子は眼を覚まして、恐怖のあまり泣き叫んだ。優しい母の姿は幻と消え、その代りに、口が耳元まで裂けた狐の顔が現れた。安部の童子にとって、「未知の女性」とは、母の背後から姿を現したこの「狐」だったのである。

それなら、「藁ごけ」の奥さんが階段を軋ませて二階に上って来たとき、蒲団の中の百閒が怖れていたのは、奥さんがいつのまにか狐に変身することではなかったろうか。「狐臭」のブンブンする奥さんの背後から、狐がその無気味な姿をあらわすことではなかっただろうか。だから、百閒は寝た。朝まで寝て、「何も知らない」ことにした。安部の童子のように、眼を覚ましたくなかったからである。

＊

狐は臭さうだから飼ふつもりもなかつたが、人から貰つたので飼つて見る事にした。

時候の加減で小便もそれ程にははず、第一、狐の身體から發する臭氣がまだその季節にならぬと見えて、覺悟した程甚だしくない。〔…〕人が近づき、檻の前の鐵格子に顔を寄せても、ちつと澄ましてゐる事もある。その時はこちらの際をねらふ様な氣合でゐるのか、それとも何か別の事を感じてゐるのか、狐の様子を眺めただけでは解らない。³³⁾

狐の顔は「だれかに似てゐる」ような氣がするが、「哲學者」でもなく「詐欺師」でもなく、「美人」を連想させる。しかしこの狐は雄である——「雄が美人に見える事は差支へないけれど、ただ鼻面の邊りがむさくるしくて、暫らく見てゐると矢張りけだ物だなと云ふ氣がする」。

檻の置き場所がないので、縁の下に入れておいた。夕暮れの早い近頃は、すぐに庭が暗くなる。狭い庭の片隅に一群の葉蘭が固まっているが、日の暮れた後では、「その邊が特に暗くなる様に思はれる」。「低い風」が吹き抜け、葉蘭の葉がかすかに鳴る——「そんな事を心に止めた事はなかつたが、狐の檻を縁の下に入れてから、急に氣になり出した」。

こうして刻一刻と闇が深まっていくありさまを描き出す百閒の筆は、絶妙というほかはない。しかもこの闇は、縁の下に狐の氣配や、「さわさわ」と鳴る葉擦れの音にわれわれが氣を取られている隙に、一段と深まっているのだ。闇はいわばわれわれ読者の背後から迫ってくる。だからわれわれは、庭がいつのまにか「眞暗」になっているのに気づき、奇異な思いにとらわれるのである。しかも今夜は月夜のはずなのに、なぜだか、庭に光は射していない。ここまで読者を追い込めば、闇の彼方の闇、言葉以前の始原の闇、言葉では描けないはずの暗闇を言葉で描くには、ただの一刷毛で足りる——

あんまり一つ事を考へ込んだので、一寸箸を置いて起ち上がり、障子を開けて庭を見た。茶の間の明りが流れてゐる筈の堀の内側が眞暗で、庭の地面は底に落ち込んでしまつたかと思はれる程の暗闇の中に、葉蘭の葉つばが薄い光りを放つてゐる。白っぽい色とその蔭とのけちめがはつきりしてゐるので、一枚一枚数える事も出来る様であつた。³⁴⁾

このくだりを読んで、いきなり地面が足下で沈み込むような不安を覚えるのは、果して私だけであろうか。庭が眞暗になつたのではない。庭そのものが消え失せてしまつたのである。その何もない暗闇の中で、ただ「葉蘭の葉つば」だけががすかな光を放っている……。 「無」について哲学的に語ることはできるが、「無」そのものを言葉で描くことはできない。そんなわれわれの思い込みを

ものの見事に覆した、名人百閒ならではの離れ技である——

家の者が、夜になるとこはくて困るから、あんな物を飼ふのは止めてくれと云ひ出した。何がこはいかと聞いてもそれは解らない様であつた。

怖いことは確かだが、何が怖いか分らない——まさしくそれが不安というものであって、ラカンによると、不安とは「他者」の欲望の感覚なのである。それなら、縁の下の「他者」は、いったい何を欲望しているというのであろうか。——「無」である。天が裂け、地が割れる、世界の消滅である。なぜなら、血を分けたわが児は父に奪われてしまった。父の息子となって旅立ったわが児に再会できる場所がもしあるとすれば、それは「海坂のあなた」の「妣の國」、父の力のおよばぬ常闇の国をおいてほかにないからである。漆黒の闇に閉ざされた夜の世界で、母と子はふたたび一つになるだろう。「もの」は「再発見」され、失われた原初の「興奮」は再現されるだろう。だがそのとき、子は父から授かった名を失い、主体としては消滅する。なぜなら、すでに見たように、「もの」は欲望の究極的な対象であり、それを「再発見」した主体は、この世に生きる意味を見失ってしまうからである。「他者」の欲望の感覚——だからそれは、始原の母のあくなき欲望、いっさいを呑みつくす無気味な空洞を前にした不安なのである。

狐が人を化かそうとするなら、何としても隠しておかねばならないのがこの欲望、死と破壊をもたらす恐るべき「他者」の欲望である。百閒の前に姿を現した三人の女のうち、この点で最も拙劣であったのは、ほかならぬ「藁ごけ」の奥さんである。奥さんは「狐臭」を不用意に発散させすぎたばかりか、百閒を誘惑するにもその手管があまりに婉曲すぎて、かえって「他者」の欲望に対する不安を呼び覚ましてしまったのである。「もの」でありすぎた奥さんとは対照的に、ラムネ屋のお神さんは「母」でありすぎた。そのあげく、百閒を安心させはしたものの、女として百閒を誘惑することには失敗した。他者性がまったくなければ、そもそも女は欲望の対象にはならないのだ。

三人のうちで一番「甲斐性」があったのは、何と言っても石巻の芸妓である。この芸妓が「もの」を体現していたことは、先生が寝床の中で「轉々反則」、眠られぬ思いをしたことでも分る。つまり、芸妓に寄せる先生の恋心の中には、「他者」の欲望に対する一抹の不安が宿っていたのである。だが、石巻の芸妓は

巧妙だった。「古里の郷音」で先生の警戒心を解いたばかりか、記憶に刻み込まれたお峯さんの「二の腕」を利用して、懐かしい母のイメージでみずからの他者性を緩和してみせたのである。先生がコロリと参ってしまったのも無理はない。

結局、百間を首尾よく誘惑できたのは石巻の芸妓だけである。その成功の秘訣は、「もの」と「母」のブレンドが絶妙であったというに尽きる。つまり、芸妓の描き出した幻においては、「もの」と「母」が二重写しになり、現実の母のイメージが「もの」の根源的な他者性を巧みに覆い隠していたのである。もしエディプス・コンプレックスが、父の妻としての現実の母に対する欲望であるならば、その真の目的は、「もの」に対する原初的な欲望を抑圧することにある。『ラカンと哲学』のジュランヴィルも言うように、「エディプスは抑圧される以前に、抑圧するものである。それも単に父性的禁止ではなく、エディプスの欲望そのものが抑圧的なのである。エディプスに従って欲望することは、根源的欲望を抑圧することである」³⁵⁾。死と破壊を招きかねないこの「根源的欲望」を抑圧するためにこそ、石巻の芸妓は母のイメージを借用したのである。フェミノファービア？ そうかも知れない。しかしここでいう「女」とは、いっさいを呑みつくすあの深淵、生きとし生けるものすべてがそこから生まれ、ついにそこへと帰る、あの「女性性器という深淵」なのである――

……それは最も奥深い現実 (réel) の出現です。いかなる媒介も不可能な現実、究極の現実、もはや対象ではない本質的な対象 [もの]、それをとらえようとする、あらゆる言葉、あらゆるカテゴリーが無効になる、そんな不安な対象の出現なのです。³⁶⁾

エディプスの幻想のうちにある限り、人はこの「深淵」に気が付かずにいることができるだろう。百間がエディプス・コンプレックスに囚われていたことは疑いを容れない。しかし百間の場合、その幻想には明らかに綻びが生じていた。たとえば、彼のために非の打ちどころのない「母」の幻を描き出してくれた石巻の芸妓に向って、なぜ百間は言うのだろうか――「夢」の奥底をたどって、土手の道を「もつと先の方へ行きなさい」と。なぜなら百間は知っていた、土手に行く芸妓の行く手に、煙の如き妖氣がにわかには立ちこめ、芸妓がたちまち狐に変身することを。あの強烈な「狐臭」が鼻をつき、幻想の皮膜を食いやぶって、始原の母がその懐しくも無気味な姿を現すことを。百間文学の根底に、

こうした闇への郷愁、「妣の國」に対する不安な憧れが潜んでいることは疑えない。

＊

そもそも當節は妖怪變化の影が薄い。なぜかはしき限りである。明治以來の文明開化の成れの果て、迷信を打破し、空想の根を芟除して、人間がさうするから妖怪變化どもは手が出ないし、張り合ひもないだらう。

その爲この興奮の後の空白を取り繕ふ事が出来ないとすれば、しかし、矢つ張り汝等は甲斐性無しの、意氣地無しの、腑甲斐無しである。山裾につらなる狐火の列、松林の中を走り抜ける狐の夜汽車の昔を想うて感奮興起せよ。³⁷⁾

だが、「妖怪變化の影が薄」くなったというのは本当だろうか。狐が「甲斐性無しの、意氣地無しの、腑甲斐無し」になってしまったというのは事実であろうか。「興奮の後の空白を取り繕ふ」ことがなくなったという意味では、その通りだろう。しかし、それは彼らが姿を消してしまったことを意味しない。むしろ彼らは、「空想」の中ではなく、この現実のただなかに跳梁跋扈しているのではないだろうか。なぜなら、なこその関は破られた。「神様や佛様」が「お留守」になり、「父」の權威が失墜したこの世界で、狐はもはや人間を化かす必要はない。人びとの「空想」や幻想の中に、「もの」の幻影を描き出す必要はないのだ。「興奮」は、わざわざ「再現」されるまでなく、毎日が祭りであるかのような日常の中で、のべつ幕なしに実現されているからである――

日章旗を高く捧げた日本の旗手を肩車に乗せて、人種取り取りの各國の選手がワツシヨイ、ワツシヨイと練り歩く。面白さうで、うれしさうで、みんな酔つ拂ひの様にのぼせてゐる。あの人ごみの、お互同士必ずしも知り合ひではない連中の仲間に、狐が一匹や二匹混ざり込んでも、だれも氣がつかないだらう。やつたらしいではないかと、私はじれつたく思ふ。尤もこちらで實地を見もしないで、齒痒がる迄もなく、あの外國の選手團の中に狐がゐなかつたと速断するわけには行かないだらう。³⁸⁾

いや、狐はたしかにいたのである。プンプン臭う連中の仲間に紛れ込んでいたのである。さもないれば、オリンピックの開会式が「酔つ拂ひ」のお祭り騒ぎになることもなかったし、最後に行進したニュージーランドの選手たちが、「御臨幸の陛下の御前」に整列して、「面白がつて、巫山戯て」、ぺこぺこ日本風

のお辞儀をすることもなかったに違いない。「官僚派」の先生には、とうてい我慢のならない、憂慮すべき事態である。だから、先生は狐どもに号令して言うのである――

ペロポンネソスの天火ではないが、太古からの我々の火を嗣がれる天津ひつぎの天皇陛下がそこに御臨幸になつてゐる。陛下のしろしめす同じ國土に棲む汝等、狐、狸、川獺のやからも、我等人間と同じく陛下の民草なるぞ。

陛下の御前に出て、^{ニュージーランド}新西蘭の選手達のように恭しくお辞儀をしろ。³⁹⁾

もちろん、先生は付け加えることを忘れない――「しかし餘り近く寄つてはならぬぞ。臭いから」。

註

- ＊）百間の文章からの引用には数度にわたり「びつこ」という語が現れるが、文章が書かれた時代背景、および著者がこの語を差別助長の意図で使用していないことを考慮し、本稿では原文どおりに記述した。この点をあらかじめお断りする。
- 1) 「狐は臭い」『馬は丸顔』、『全集』第9巻、405頁。百間の引用はすべて講談社版『全集』による。
- 2) 同上、406-407頁。
- 3) 同上、406頁。
- 4) 同上、408頁。
- 5) 「浦づたひ」『東海道刈谷驛』、『全集』第8巻、353頁。
- 6) 同上、355頁。
- 7) 同上、352頁。
- 8) 前掲「狐は臭い」、406頁。
- 9) 前掲「浦づたひ」、354頁。
- 10) 前掲「狐は臭い」、406頁。
- 11) 『吉野葛』、『谷崎潤一郎全集』第13巻、中央公論社、1967年、28頁。『吉野葛』については、江藤淳の明快な谷崎論が参考になった（「谷崎潤一郎」、『江藤淳著作集』続2、講談社、1973年、35-40頁）。
- 12) 同上、32頁。
- 13) 前掲「浦づたひ」、354頁。
- 14) 同上、356頁。
- 15) 「枝も榮えて」『日没閉門』、『全集』第10巻、331頁。

- 16) 「ねぢり棒」『鬼園の琴』, 『全集』第6巻, 287頁。
- 17) 前掲「浦づたひ」, 356頁。
- 18) 同上, 357頁。
- 19) 「土手」『麗らかや』, 『全集』第10巻, 31頁。
- 20) 「曾遊」『無絃琴』, 『全集』第1巻, 497頁。
- 21) 前掲「土手」, 32頁。
- 22) 同上, 33頁。
- 23) 「目出度目出度の」『日没閉門』, 『全集』第10巻, 327頁。
- 24) 前掲『吉野葛』, 48頁。
- 25) 前掲「土手」, 33頁。
- 26) 前掲「目出度目出度の」, 327頁。
- 27) 「文學と饗宴と」, 『折口信夫全集』第7巻, 中公文庫, 1976年, 273頁。
- 28) 同上, 271頁。
- 29) 「信太妻の話」, 『折口信夫全集』第2巻, 中公文庫, 1975年, 273頁。
- 30) Jacques LACAN, *L'éthique de la psychanalyse*, Paris: Éd. du Seuil, 1986, p. 87. 訳出にあたっては、タイプ印刷のいわゆる「海賊版」も併用した。〔 〕内は訳者による補足。邦訳: 『精神分析の倫理』上 (小出浩之他訳), 岩波書店, 2002年, 107-108頁。
- 31) *Ibid.*, p. 65. 同上, 77頁。
- 32) 前掲『吉野葛』, 31頁。
- 33) 「葉蘭」『船の夢』, 『全集』第4巻, 246頁。「作文管見」で百閒みずから種明かしをしているように (『全集』第4巻, 410頁), この狐は葉蘭の「眞實」を表現するためのフィクションである。
- 34) 同上, 247頁。
- 35) Alain JURANVILLE, *Lacan et la philosophie*, Paris: PUF, 1984, pp. 199-200. 邦訳: 『ラカンと哲学』(高橋哲哉他訳), 産業図書, 1991年, 186頁。
- 36) Jacques LACAN, *Le moi dans la théorie de Freud et dans la technique de la psychanalyse*, Paris: Éd. du Seuil, 1978, p. 196. 邦訳: 『フロイト理論と精神分析技法における自我』上 (小出浩之他訳), 岩波書店, 1998年, 273頁。
- 37) 前掲「狐は臭い」, 408頁。
- 38) 同上, 406頁。
- 38) 同上, 409頁。